

アラウンド GOGO 55



華麗な声に加齢とともに

哑れていった?!

土岐邦彦

今年の夏の異常な暑さは、自らの身体の衰えを我が身に
もひしひしと感じさせた。

私にとっての衰えの兆候は「声」に出た。何もとりえのないことを自覚している私でも、「声」だけには若いころから自信があつた。中学の部活のバスケットの試合では声の大きさだけが評価された。かつての同僚であつた声楽の先生からは「よく響く、いい声をしているね」と褒められたこともあつた。大教室での講義でも、内容はともかくマイクを使うことなく授業ができ

ることが自慢であつた。

あまりつまびらかにしてはいないが、私は大学の教員以外にもうひとつの草鞋を履いている。その草鞋こそ、まさに「声」が重要な商売道具だ。その道具としての「声」に響きを感じられなくなつたのだ。私はあわてた。そして、これが私にとつての加齢現象なのだということに自覚した。

華麗な声に加齢とともに哑れていったのだ(?!)

*

そんな自分の「声」などどうでもよいのだが、私は障害

をもつ若者たちの演劇集団の顧問をしていることもあつて、彼らの「声」にはより敏感でありたいと思つている。

障害をもつ子ども・若者たちの「声にならない想い」「言葉にならない想い」を汲み取ることは大切だ。しかし、舞台の上ではまさに「届く声」が必要とされる。若者たちは「もっと大きな声で」「はつきり」と要求される。そして小さな声が少しずつ大きくなり、不明瞭な声が少しずつ明らかになってくるとそれだけであれしくなる。

また、抑揚のない言葉が特徴の自閉性障害の若者が、言葉には抑揚がないままでも、一つひとつの言葉に「間」をつけることによつて観る人たちの心にしつかりと台詞を届ける工夫を自らこらしたときは、観劇しながら感激したのであつた。

学生にも我が子にも無視されていのに、こんなギャグを言つて一人で喜んでいたりこそが加齢現象なのかもしれない。でも、今度こそうけてやろうと狙っている私はまだ若いと思つている。

(全障研岐阜支部長)

※「アラウンド55(ゴーパー)」は、50代の会員によるエッセイコーナーです。